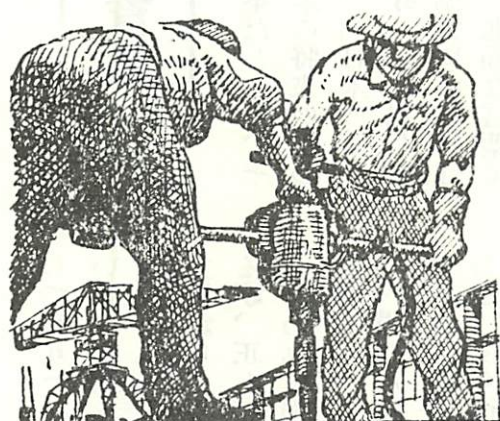


特
集

中学校における

適性検査の限界



NO. 7

— 1952・3 —

目 次

- 適性検査の限界(一)
.....鈴木 壽雄...(1)
- 大分県の職業教育
.....後藤 豊治...(10)
- 甲南中学校を訪ねて
.....清原 道壽...(12)
- 研究書紹介
研究会だより

逆コースの一環・実用的職業教育論

折角坂の途中まで、あえぎながらも登りかけている車を、ガラガラとあと戻りさせようとするのを逆コースという。

昨年政令審査委員会とかいうものが、教育改革案だと稱して、六三制の義務教育を、普通教科課程と実用的職業教育とに分離する案を公にしこれが議會でも取り上げられて、待つてましたとばかり逆コースを喜ぶ多数の議員の中に賛成者が少くなかつたということは、教育上の重大問題として注目された。

これに對して、事重大なりとして反對の聲をあげたのは教育學者のグループで、直ちに反對声明を発表した。また昨年十二月二十三日の毎日新聞で、東大教授勝田守一氏は、逆

行する教育制度改革案だとして、その愚昧さをつき、日本の將來のために憂慮すると反對し、「日本のこともの將來は、国民自身とくに親たちと教育関係者たちの協力によつて守つていくほかない」と悲痛な言葉で結んでゐる。

さて、彼等が改革案だという実用的職業教育とは、どんなものか。中には義務教育六年説を出すものさえあつたというから、それでも明かなように、上級学校へ進むものには一般的な教養を与え、そうでないものには、すぐ役に立つて道具のようにならざる、人間を作らうといふのである。しかもそれが「国力国情に適合

しており」「産業振興に必要な」というのである。

勝田守一氏は、教育の機会均等の立場から、この分離案に反對しているが、正しい職業教育の立場からいふわれわれは強くこの案に反對せざるを得ない。

一個の人間としての正しい職業教育には、広汎な教養が絶対に必要である。すぐ役に立つ、使用者側に都合のよい人間を作ることとは、凡そ反對である。またそれではわが国産業の振興の望まれない時代である。

こうした正しい職業教育が、今や新しく出発しようとしているのである。このときに當つて、教育制度を逆コースに持ちこむことは、明かにその發達を阻害するもので、われわれの絶対に承服し得ない所である。



中學校
における

適性検査の限界

(一)

——職業に成功する要因は何か——

鈴木 壽雄

はし が き

われわれは前号『職業教育の現状とその改善策』において、従来の「実業教育」、「職業指導」に由来する指導理論を根本的に克服し、「職業科は有能な職業人を育成するため、技術の基礎的陶冶を旨す教科である」という立場を提唱した。

だからといってわれわれは、「将来の職業を選択する能力の涵養」を目標とする選職指導の重要性を故意に見落したわけではなく、このような指導は獨り職業科だけでなくあらゆる教科を通じてなされるべきもので、このようにしてこそ始めて健全な職業指導といえるということとを強調したのであった。従つて職業科における選職指

導は、この限りにおいて重要な意義をもつのである。しかるに今日の職業科教育は、多分に選職指導のみに重点をおいているため、かえつて職業科本来の教育的意義を見失つている。

ここにわれわれは職業科教育における選職指導はどうあるべきかという問題を、今日の教育方法を具體的に再検討することによつて考えてみよう。今日の職業科教育は前述のような立場から、「適性の發見」をまず第一の目標としている。このため、職業適性検査を始め、多くの心理学的テストが非常に高く評價され、その実施の流行をみるに到つた。教育の科学化という観点から、このようなテストを必要に応じて使用し、問題解決の一つの資料とすることは、むしろ望ましいことであり、当然な

要求であると考えられる。

しかしながら教育現場の実情をみるに、これらの検査法を適性発見の最も重要な方法とみなし、選職指導のプログラムの大部分を検査の実施にあて、検査成績を絶対的なものとして盲信している傾向が強い。このような、「テスト万能論」は、教育の科学化という立場とは正反對のものであり当然批判されなければならないであろう。

以上のようなテスト乱用の態度が、職業科本来の目標である技術教育の意義を軽視し、その正常な発展を阻害している現状をみると、われわれは職業科教育における適性検査法をどう位置づけ、選職指導をどのように行うべきかという問題の急速な解明の必要を感じるのである。われわれは決して「テスト無用論」を意図しているのではない。むしろ、これらのテストの合目的な合理的な使用を主張したいのである。

職業適性検査のもつ意義は、将来の職業的成功の予見にある。つまり、適性検査によつて適性を発見し、それに従つて職業を選択すれば、将来の職業生活において成功するであろうという仮定に立脚している。このように職業的成功の要因を適性にだけ求めている仮定は果して正当なものであろうか。この点の究明が適性検査を批判するに當つて重要な意味をもつ。

ここでわれわれはまず職業的成功とは何かということを考えたい。その前提として、産業労働者に必要な資質は何かということを分析する必要がある。その分析によつて適性の意義を明確にすることにしよう。

一、代表的産業部門の選擇

われわれが産業労働者に必要な資質を分析するばあいには、各産業部門の各職種にわたつて具体的に觀察する必要があるであろう。この方法がすなわち「職務分析」である。われわれがここで究明しようとしている資質はこのよりの具体的なものではなく、これらの具體的なものをすべて包括する類型的な概念をさしている。つまりあらゆる産業労働者に共通的に必要な資質は何かということを問題にしているのである。従つてこのばあい、産業を代表する一産業部門を、選擇することが可能ならば、その産業部門を正しく見究めることによつて、その中に働く労働者の実態を知り、これからあらゆる産業労働者に必要な資質を類推することができるわけである。

ここでわれわれは、代表的産業部門として工業部門を選擇しようと思う。なぜなら、工場労働はあらゆる協業的労働の典型的なものであり、また、職業適性検査において対象としている職種群二〇の中、一三までは工業部

門に属しているからである。

二、近代工業の特質

工場労働者に必要な資質を分析するばあい、その資質を規定する近代工業の特質の考察を必要とする。ところが工業分野の構成は、産業分類表をみてもわかるように多種多様に分化されているし、かなり異質的な部門を包含している。それ故、どこにその規準を見出しその本質的特徴を把握してよいか迷うほどである。われわれはその把握の手がかりをつぎのように考える。

近代工業が今日の隆盛を極めるに到つた根本的な要因をその発展史に求めれば、「機械化」「分業化」「大規模化」の三つの要因を容易に見出すことができる。これらの特徴をそこに働く労働者との関連において把握するとき、われわれは、近代工業の共通的な特質を「作業方式」の面から見きわめることができる。

工業分野に属する各部門の内容は千差万別であるが、作業方式の面からみるとつぎの三つの型に分けられる。

(イ) 単獨作業 各労働者が各自の作業を全く他の作業から独立して行つた型である。

(ロ) 組作業 二人以上の労働者が一組となつて作業する型で、組に所属する各自の受持作業はそれぞれ

異なり、全員そろつて、はじめてその作業が完全に行われる。

(ハ) 流れ作業 加工する順序に各部分作業を受持つ労働者が並び、材料が加工順序に従つて機械的に送られる型で、この一系列に従事する労働者は一つのグループを形成している。

作業方式は工場の近代化・合理化が進むにつれて、単獨作業——組作業——流れ作業という方向に漸次発展してきた。この事実を、われわれは近代工業の特質と考えるわけである。

三、工場労働者に必要な資質

具体的に個々の職種について観察するならば、それらに要求される資質は、知能・運動能・感覚および知覚的能力・技術的知識・技能・体力などのおのおのについてそれぞれ異なるものである。しかしここで分析しようとする資質は、前述のように類型的な共通的な資質である。

これまで、このような意味で労働者に要求された唯一の資質は「熟練」であつた。熟練労働者、半熟練労働者不熟練労働者の区分がすなわちそれである。作業方式が単獨作業であつた過去において、また現在もそうである特殊な部門においては、そこに働く労働者は一個独立の

存在としての生産者であつて、彼等の價値は、専らこの熟練という尺度で測れるわけである。

ところが作業方式が組作業あるいは流れ作業である近代工場に働く労働者は、相互に結合された部分的生産者であつて、決して一個独立の全体的な生産者ではない。すなわち、作業方式の飛躍的發展は、①手工的熟練の必要度を著しく減少し、②生産を大幅に機械に依存させ、③個々の労働者の生産量を客觀的に捉えることを困難にし、④労働者に対して、機械の連続的操作における規律性・信頼性のような特性、経営に対する責任感、同僚および監督者との協調性、一般的知識、先見力、事故を防止する能力、創意工夫などの資質を要求するにいたつた。つまり大量生産方式下における労働者の價値は、個別生産方式下におけるよるよるに單に熟練という尺度によつただけでは正當に測れないわけである。

このように考察を進めるとき、近代的工場労働者に必要な資質は、要するに、従来の「熟練」「体力」に加えるに、「作業態度」「生活態度」ということになるのではないだろうか。なお、このばあいの熟練は、その内容において、従来のようなカンとコツを中核とする手工労働的熟練から、科学と近代技術の理解を基礎とする監督的・技術的熟練に変容したものを意味している。

四、職業的成功の要因

a 勤務成績評定の要因

職業生活において成功するということは、経営の中でこれをみたばあい、勤務成績が優秀であるということである。従つて職業的成功を規定する要因は、実は勤務成績を規定する要因にほかならない。われわれはここに、その要因として、さきに分析した「熟練」「作業態度」「生活態度」「体力」の四つをあげることができる。つまり、勤務成績とはこれらの資質の反映であると考えられる。

さらに具体的にこれを考察すれば、勤務成績は「しごと」の正確さにおいて捉えられる熟練、「責任感」において捉えられる作業態度、「勤勉さ」において捉えられる生活態度などが、一人格として労働の具体的な場面に反映したものである。従つて勤務成績評定の対象は、労働している人間そのものであつて、労働者の腕や生産高などではない。

従来、職場では勤務成績についての正當な認識を缺きただ漠然と主觀的に評定したり、生産記録とおきかえたりしたが、これは労働者を單なる「労働力機械」とみなす立場にたつたもので誤つた考え方である。

機械であれば、能率の良いものが優秀であるともいえるが、人間のばあいには、腕が良いからといって必ずしも優秀であるとはいえない。また逆に、勤務成績の悪い者が必ずしも腕が劣っているとは限らない。労働者の価値は、このように人間を機械と同一視する立場からは正しく評定することはできない。それはただ、労働者を主体的に把握する、つまり「労働力の所有者」とみなす立場においてのみ可能である。

最近、経営の合理化の進行にともない科学的な人事管理が要請されるようになり、勤務の客観的把握を目的とする「人事考課制度」が次第に確立しつつある。これによつて、勤務成績に関する多くの問題は、将来においてさらに明確にされるであろうと思われる。(現行の人事考課制度の大部分はアメリカの模倣であり、理論的にも実用的にも日本の実情とかけ離れている面が多い。ところが日本の企業においては、当面の人事管理上の諸問題を早急に解決せんとするのあまり、無批判にこれを利用してゐる。経営の民主化の観点から、根本的な研究の必要がある。)

b 職業的成功の内的要因

つぎに、われわれは職業的成功を規定する要因が労働という人格的活動に、どのように機能するかという問題

を考えてみよう。

さて、「熟練」は人間の知的な機能の総体であり、「作業態度」「生活態度」は情意的な機能の総体であるとなすことができる。従つて労働は、知的な機能と情意的な機能によつて組み立てられた人格の働きであるといえる。では、その両機能はどのように連関しているか。実際的な研究の結果に基いて推論しよう。

第1表および第2表に示したデータは、われわれが某機械工場の工員四五〇名について、勤務成績と検査成績との関係を追試するために行つた研究から得られたものである。(勤務成績は「しごと」の正確さ」「責任感」「勤勉さ」の三つを評定項目として評定された。勤務成績に関する諸問題については、他日これを詳細にしたいと考えてゐる。)表の「正常」「異常」の区分は、便宜上の区別であつて、精神医学的な異常者(精神薄弱・精神機能障害・異常性格など)だけを意味してゐるのではない。第1表から、工員各階層間に著しい差異は認められない。優秀工員では低劣知(精神薄弱が予想される)に相当する者が無く、問題工員ではその比率が他にくらべて高いが、全体としては優秀工員が必ずしも知的に優れているとはいえず、また逆に問題工員が必ずしも知的に劣つてゐるとはいえない。

第1表 勤務成績と知能との関係

(鈴木信式第一知能検査による)

知能検査成績 勤務成績	正		常		異常	
	優良知 (15)	上知 (181)	普通知 (178)	下知 (64)	低劣知 (12)	
優秀工員 (34)	2 5.8	18 52.9	6 17.6	8 23.5	0 0	
上普通工員 (120)	3 2.5	51 42.5	46 38.3	16 13.3	4 3.3	
中普通工員 (165)	3 1.8	62 37.6	77 46.6	19 11.5	4 2.4	
下普通工員 (99)	6 6.0	40 40.4	36 36.3	15 15.1	2 2.0	
問題工員 (32)	1 3.1	10 31.2	13 40.6	6 18.7	2 6.2	

(注) 1. () 内の数字はそれぞれの総頻数を示す。

2. 各欄の左上の数字は頻数を表わし、右下の数字は工員階層別の%をあらわす。

第2表から、優秀工員と問題工員の間に著しい差異が認められる。優秀工員の八二・四%は情意的に正常であるのに反し、問題工員の六八・六%は情意的な欠陥をもっている。特に問題工員においては、異常型(精神機能障害が予想される)に相当する者の比率が他に比べて

第2表 勤務成績と情意との関係

(クレペリン内田作業素質検査による)

情意検査成績 勤務成績	正		常		異常	
	定型 (15)	準定型 (145)	準々定型 (167)	疑問型 (115)	異常型 (8)	
優秀工員 (34)	2 5.8	10 29.4	16 47.0	6 17.6	0 0	
上普通工員 (120)	5 4.1	42 35.0	49 40.8	23 19.1	1 0.8	
中普通工員 (165)	5 3.0	58 35.1	55 33.3	45 27.2	2 1.2	
下普通工員 (99)	2 2.0	35 35.3	38 38.4	22 22.2	2 2.0	
問題工員 (32)	1 3.1	0 0	9 28.1	19 59.3	3 9.3	

(注) 第1表の注と同じ。

著しく高い。以上の考察から、勤務成績は知能よりむしろ情意的特性に著しく支配されるということがいえる。このことから、情意的特性が人格活動たる労働の基盤となつて、その上に知的な活動が構成されると推論される。従つて、

いかに優秀な腕をもつていても、意志が薄弱であつたりむら氣であつたりしては、その腕を十分發揮することができない。また、しごとに対して野心がもてないばかりや喜びを感じないばかりも同様である。反対に、情意が安定していてその上、しごとに対して野心をもち続けることができるばあいは、たとえ最初は腕が劣つていてもそれは次第に克服されるものと考えられる。

かくして、職業的成功を規定するものは知的要因たる「熟練」と情意的要因たる「作業態度」「生活態度」とであり、後者が前者の基盤となつて職業的成功を規定するものであるといえる。もちろんこのばあい、人間は精神肉体的な存在であるから、「体力」という身体的要因を無視することはできない。

さて、このような職業的成功の要因は、労働者の側に求められるいわば内的な要因であるが、これが成りたつためには、経営の側に求められるいわば外的な要因が前提されなければならない。

c. 職業的成功の外的要因

まず第一にあげられる外的な要因は、好適な「作業環境」と最良の「労働条件」とである。とくに、後者の意義は重大である。

いかに優れた腕と勤労意欲をもつていたとしても、そ

れを抑壓するような作業環境あるいは労働条件であるならば、労働者はその資質を十分發揮することができず、やがてはしごとに対する理想や野心を失い、能率の低下をきたすようになる。これは労働者の側にある欠陥ではなく、経営の側に求められるべき欠陥である。

このようなばあいに、発生する勤務不良者を「不適応者」とみなすことは許されない。なぜなら、以上の悪条件を改善すれば、その労働者は優秀な労働者になり得るからである。労働者の価値は、このような諸条件の合理化への配慮がなされて始めて評価されるべきものである。従つてその前提を無視して、現象的にのみ労働者を把握してきた従来の経営側の態度は、当然改められなければならない。

眞に労働の生産性を高めるためには、さきにも述べたように、労働者を「労働力の所有者」として考える立場にたつべきであるということ、ここで再び、強調しておく。労働者に求められる「適応」の問題は、実は以上の諸条件の改善の後に考えられるべき問題なのである。また、このような事態を見きわめることなく、雇用の立場から皮相的に「不適応現象」を捉えようとしたところに従来の「雇用心理学」の限界があつたわけである。この種の不適応は、いわば二次的な不適応であつて、労働者

の側に求められるべき眞の不適應現象ではない。

つぎにあげられる外的な要因は「職業上の機会」である。いかに優秀な労働者であつても、その資質を發揮すべき「場」が与えられなければ、職業的に成功することはできない。たとえば、就職の機会とか配置の機会とか昇進の機会などがそれである。すなわち、労働者がその資質を十分發揮するためには、資質と職務のバランスが必要である。このバランスが保たれていないばあい、つまり資質がかちすぎているか、あるいは職務がかちすぎているばあいには、前にのべたような不適應を起すことがある。前者に対しては、より責任ある職務への配置転換が必要であり、後者に対しては、より安易な職務への配置転換が考慮されなければならない。(このばあいは十分ゆき届いた指導訓練が前提となる)このような配慮こそ、これからの「労務管理」に要求されることである。従つて、職業上の機会をできる限り、多く労働者に与えることこそ、本来の意味の「適正配置」であるといえる。もちろん、適正配置には、これ以外に、つぎのべる人間関係を十分考慮にいれなければならない。

つぎにあげられる外的要因は、職場における「人間関係」である。同僚との関係・監督者との関係がそれである。今日の産業労働者はさきよのべたように、つねに組

織の中にあつて働く、部分的生産者である。従つて彼等は生産的なグループを形成し、生産の秩序を介して緊密に結合している。従来のように、各自が孤立して全体と無関係に働くという部門は非常に少い。ここにおいて、当然人間関係の問題が重要な意義をもつ。つまり、職場における人間関係の調整こそ、経営の側にとつても労働者の側にとつても重視されなければならないことである。そこに不調和があるばあい、労働者の資質と関係なく前述のような不適應をひき起すことになる。従来は労務管理は單なる能率化にのみ眼をうばわれ、労働者間の人間関係への配慮を軽視したきらいがあつた。しかるに、生産の能率化が実際に展開するためには、その根底として「労働力の所有者」としての労働者の構造が合理化されなければならないのである。

元來、「産業心理学」は主として個人心理学に立脚するものであつた。しかしながら、経営における人間関係の問題は、こうした個人心理学的な観点を超え、集团的・組織的観点からなされなければならない問題である。

最近、アメリカから日本にも導入されたP・R(パブリック・リレーションズ)運動は以上の要請に基いて起つた運動であるが、もしそれが単に、労資間の緊張を一時的に緩和するための方便に墮さなければ、本問題の解

決の方策として重要な役割を果すものと思われる。(なお、日本におけるP・R運動は対外的なものに重点をおき、新広告術に変貌しつつあるが、このような傾向は本来の意義を歪曲する危険がある。われわれは、労資関係の合理的な解決が望まれている現状においてはむしろ、対内的な対従業員P・Rに重点をおくべきであると考え(ともかく、本問題はこのような社会心理学的な配慮によつてのみ解決されるものである)。

以上考察した「作業環境」「労働条件」「職業上の機会」「人間関係」など、あらゆる外的条件について万全の配慮がなされても、なお、不適応現象をみることがある。ここに始めて、その起因を労働者の側に求め、それをわれわれは本来の意味においての「不適応」と考えるこのような眞の不適応現象はさきに考究したように、労働者の情意的特性の欠陥に基づくものと思われる。

d 職業的野心 (Vocational ambition)

われわれは職業的成功の要因をあらゆる角度から分析し、その本姿をある程度説明することができた。以上の考察から理解されるように、職業的成功の要因は一面的な見地からは到底把握されるものではない。内的要因と外的要因の連鎖を十分考慮した上で、後者を前者の前提条件とみなせば、職業的成功の要因は結局、つぎのように結論することができよう。

職業生活において成功するかどうかは、専ら、個人が

その職業に理想なり野心なりをもち続けることができるかどうかにかかっている。このような個人の情意的特性の方向である理想あるいは野心をいま「職業的野心」(ポケーショナル・アンビション)と呼ぶことにすれば、この職業的野心がつねにその職業に働いている限り、ある程度知的な機能に欠けるところがあつても、その障害をのり越えていくことができる。

従つて、單なる「適性」をもつて職業的成功の要因とみなす仮定は、余りにも近視眼的な皮相的な見解であつて、これは専ら人間を機械と同一視する立場に由来する前世紀的な謬見である。このような假定が、適性検査の合理的な合理的な使用を誤まらしてきたのである。われわれは、このような非人間的な冷酷な立場を、人間主義的な観点からも絶対に支持することができない。この点については、次号において適性概念を十分吟味した上で、中学校職業指導における適性検査の限界について論及するであらう。(東京都杉並区井荻中学校)

〔参考〕マイヤーズは職業的成功の要因として、「野心」(ambition)をあげてゐる。〔G. E. Myers: Principles and Techniques of Vocational Guidance, P. 218 (1941)〕〔職業指導の原理と技術〕
A. J. シモンズは「目的と理想」(aims and ideals)をあげてゐる。

〔Principles of Guidance, P. 331 (1945)〕

大分県の職業教育

後 藤 豊 治

主要関心

地方新聞の記事・論説、県会議会での論議、校長や職業教員たちの声いづれを聞いても職業教育振興、施設充実への関心がかなり高いことはうかがえる。

その高等学校における一つのあらわれは、職業高校の独立運動である。旧制中学校女学校などと合して総合制高校の一コースとなつた実業学校関係者の独立運動である。この運動の裏面には、総合制高校における普通科課程のヘゲモニーに反撥する実業学校出身教員が、地区選出議員と結んで、職業高校独立をなした

げようとする動きが色濃くうかがわれる。

しかしこの運動は、旧への「復帰」ということが強く全面に出ていて、職業高校独立の意義や独立後のあり方について十分な検討が加えられていないように思われないうところに、職業教育振興の気運に便乗する騒ぎのように見られる弱さがある。地方議員との結びつきが深まつて、県教組と高教組の対立を鋭くしてしまつた気配が見とれることは、なおさら遺憾である。

中学校関係では「施設を充実せよ」の叫びが高い。文部省指定学校の研

究会で、参加会員があらゆる問題の帰結を「施設充実」へもつていつてしまつたのを見て、このことはうかがえる。しかし「施設充実」は、中学校の職業教育のあり方・職業教員養成方途などの検討や運動とともに推進すべきことであらう。

以上、県の主要関心についてのべてみた。

中学校職業科教育の現状

過去三年間にわたつて職業・家庭科運営の研究に力を注ぎ、県におけるパイオニアとしての歩みを続けてきたのは大分市立王子中学校である。この学校の運営が県下中学校に及ぼした影響は高く評価されるが、他の学校がその地域性や学校の主体的条件を無視して、そのまま模倣しようとしたところに問題がある。

最近この学校における研究会がや魅力を失つてきたのは、他校に比して設備や指導スタッフが余りかけ

離れていることにあるようだ。研究会への参加者は大い、「この研究発表をみても余り参考にならない。私たちのところで、この設備この指導陣を得ることは夢に近い。」とっている。

またある参会者は「県内どここの研究会へ行つても、デモンストレーションの型がきまつてしまつた。都市の中学も農村の中学も同じことばかりやつている。それも一時借用の道具でその場限りの授業をやつているところさえある。どこに独自性があるのだろうか。」とものべている。

これはこの中学校をモデルにして、地域性や学校の全体的条件への十分な勘案もなしに模倣されることへのなげきと困惑であるともみてよからう。

「職業科が中学校のカリキュラムの主要な地位をしめることはよくわかつた。それにはまず施設だ」とい

うのが職業・家庭科担当教師の声である。しかしこの声が大きな運動となるほどには、他教科担任教師たちの理解をかちえていない。指定校王子中学においてさえ、職業・家庭科への予算が過大であるとの他教科教師の不満がもれ聞える。高教組の職業教育振興への努力や中学校職業・家庭科教師の集りである職業教育振興会の努力も、一般の他教科教師の理解を本当に高めるまでに至つていない。

職業教員の養成

三学級—六学級の中学校校長の悩みは、どのような能力をもつ教師で職員を組織するかである。とくに職業・家庭科担当教員の配置に悩みがある。ある校長は「私としては、どの教員も何らかの職業技術をもち、しごとの指導ができることを望む」とのべたことがある。ところが小・中学校教員養成を目的とする筆者の学

部の状況は以下のようである。昨春卒業者中職業科教員免許取得者二名、家庭科四〇名、本年の受講者は職業科六名、家庭科十名である。これでは要求をみたせない。この根本原因は地域の要求に超然たる大学のあり方に問題がありそうだ。私としては中学校教員免許状を希望する者には、職業技術並に職業指導を必修させるような態勢を整え、強制することが第一と考える。

とに角この点でも簡単に打開できない難関が横たわつている。(大分大
学助教)

「日本生産教育協会」との提携

和田小六氏を会長とし、宮原誠一氏等を常任とし、桐原葆晃、都留重人、中谷宇吉郎、古島敏雄氏等十数名を理事として、本年二月発足した日本生産教育協会は、職業教育には大きな関係があるのでわれわれの研究会でも研究員を推薦し積極的に提携する方針である

梨 山 県
 実 験 学 校
 甲 南 中 学 校 ね て
 を 訪 ね
 清 原 道 壽

甲府から山梨交通バスに乗り、富士川に沿った駿州往還を南に約一時間半走ると、富士川の溪谷に沿った山間に、西島・静川・大須成三村の組合立学校として甲南中学校がある。二月二日の公開研究会にまねかれ、一日夜、雪の東京をたち、甲府に一泊。翌朝九時半、この山間の中学を訪れた。

交通のあまり便でない山村にもかかわらず、県の春日教育研修所長、秋山指導主事をはじめ、県下の職業

家庭科担当の諸先生数百名の参会は、該科についての関心の深さをしめすものといえよう。

午前中二時間の公開授業は全教科にわたり、各教科を職業教育と関連してどうとりあぐべきかをしめす試みとして示唆に富んだものであった。その指導の末梢的な面では、まだ未熟な点もあるが、佐野校長の下に全教員が職業教育のあり方について眞摯にとりくんでいる如実な姿が各々の授業にあらわれていて、今後の中学校教育の正しい方向をしめしているものといえる。

またホーム・ルームの時間をガイドンスアワーとして、そこで職業指導を取りあつかっている点は特色といえる。その指導の重点が、われわれが本誌で問題としたように、志向の指導におかれていることも正しい方向である。

午後には職業科・家庭科・職業指導の三部会が開かれ、活潑な批判討議が行われた。

職業科部会では、各教科間の指導の重複をどうするかが問題とされていた。職業指導部会では、職業教育と職業指導の分野について論議されていた。これらはともに現場の実践を通して解決さるべき根本的な問題である。

部会・講評につぐ筆者の講演では戦後の教育思想と職業・家庭科の題の下に、今後の職業・家庭科の教育が日本の社会的基盤の上にたつた教育思想を裏づけとして、いかにあるべきかを浮彫りする意図をもつていたが、時間の関係で十分に意を盡すことができなかつた。適性の問題については、本誌に詳述したが、われわれの研究会では、今後の誌上において以上の問題を究明していく予定である。

夕闇せまる富士川沿いに佐野校長と切石の旅館に行く。

この寒山村に、日本の産業改造の基礎となる教育がうちたてられつつある。校長の下に全教員および地域社会の人たちが一体となつて、職業・家庭科を中核とする教育が築かれつつある。私たちが各地のモデルスクールを訪ねてみて感ずることは、ある学校では一部の教師だけが精力的な活動をして、学校の全教員が一体となつて努力していない。また教師は一体となつていても、地域社会の人たちの関心は全く薄いばかりが多い。ところがこの学校では地域社会の人たちが、学校の経営方針に強く協力している。地域の人たちの関心をここまで高めるまでの学校長はじめ諸先生の努力は並大抵ではなかつただらう。

夜は旅館で懇談に時を過した。ざ

つくばらんに教育の問題について眞摯な疑問をぶちまけられる諸先生の態度は、私にとつて愉快なひとときであつた。

翌日は佐野校長のお世話で大須成村の青年学級を見せていただいた。旅館から山道を四十分ほどのぼつた小学校がその日の会場であつた。

農業でも林業でも生活のたかいたかない山村を、何とかして新しい豊かな村にしようとの運動の一環として、神宮字公民館長の指導の下に、青年学級がとりあげられている。文部省からも県からも全くの補助金なしで、青年と指導者たちは新しい村づくりに眞剣にとつくんでいる。養鶏五カ年計画の一環として青年諸君が自主的に研究した成果の一端が発表された。オンドル式育雛箱に関するすばらしい発表である。このような青年たちの研究が集積されていく

ことによつて、村はたち直され、ひいては日本の国民経済は改造されていくであらう。

甲南中学校の基礎的技術の教育の上に、このような青年学級が成長しつつあることは、今後の農山村における教育の正しい方向を示唆するものといえよう。

午後、小学校に別れをつけ、県の三富社会教育主事、佐野校長とともに山道に沿つた部落を通りながら、この地域の産業や民情の実情を詳さに聞くことができた。この実情の上になうちたてられていく教育の十年後の成果を期待しつつバスで甲府へ向つた。(国学院大学助教)

☆

☆

☆

☆

職業・家庭科指導細案

(職業篇・家庭篇)

宮原誠一

研究書紹介

清原道壽編著

羽仁説子

職業・家庭科教育の教師用書が殆んどないとき、職業篇・家庭篇の二冊が出たことは、該科教育の推進のため喜ばしいことである。

内容は総論と指導細案例にわかれているが、従来 of 指導書と異つて、細案に重点があり、ページ数の九三%をしめている。そして日々の学習にそのまま使えるように親切に解説されている。本書の細案例によれば、専門的教育を受けなかつた教師にも、すこしの努力で基礎的技術の指導が容易になされるであらう。いかえれば職業・家庭科教師のため

の良心的虎の巻といえよう。

ふつう虎の巻というのと、一夜づけに非良心的につくられるものが多いが、本書は「今後の日本の産業改造・生活改造のためには、中学校教育の中核教科は職業・家庭科であらねばならないという観点に立つて」一年有余にわたり、教育学者・技術者・教育実家が協力研究した成果だけに、職業・家庭科の指導細案としては決定版といえる。

指導細案例に比して総論が簡単なのは、本書の性格から当然のことではあるが、職業・家庭科の総論的な参考書としては昭和二十五年一月に出た杉山一人編著「職業家庭科指導の実際」(第一出版発行)以外に見るべきものがない現在、本書に参加した人たちによつて労作の出版されることを期待してやまない。(B5大判 職業篇六五〇円 家庭篇五〇〇円 発行所東京都新宿区揚場町一

牧書店)

月刊 雑誌 労働の科学 (労研編集)

労働衛生・労働心理の研究において、最も権威ある機関である労働医学心理学研究所が「衛生・安全・人事管理者のための」月刊雑誌として発行されているものであるが、職場を労働科学的に研究した論文や紹介は、職業・家庭科教育にも有益な資料を提供してくれる。とくに今年一月―二月号には、狩野博士が「適性の問題と適性検査の意味」の題で、流行をみている一連の適性検査法に、長年の経験と研究をもとに鋭い批判をなされている。本誌読者の一読をおすすめする。(発行所東京都世田ヶ谷区祖師谷二ノ一二二六 労働医学心理学研究所)

研究会だより



▽特集號を送る

昭和二十六学年度もいよいよおしまつてきました。昨冬十二月に出す予定だった本誌も、色々な都合で今日に至り、お手元へ届ける運びとなりました。

本号は、御覽の通り、会員鈴木氏が一カ年にわたつて研究し、実験してこられた結果を昨年十一月末、東京都本所中学校での研究会で発表し、会員で討議したものを要約した「適性検査」の問題を特集としました。

色々なペーパーテストや器械によるテストをやれば、科学的に適性発見ができるかのように、一種の流行になつている適性検査法が、どの程度信用できるか、どこに価値を見出すべきかを、調査に基いて究明しようとした

ものです。本号につづいて次号で完結します。皆さんの熟読を希望いたします。

▽今後の研究課題

三月の研究主題としては

「文部省試案、職業・家庭科学習指導要領」について文部省の委員を中心に話しあい、色々検討したいと思つていす。その結果は、四月中に、本誌に特集する予定です。なお、現在予定している研究主題はつぎのようになります。

- 1、職業科における基礎的技術の探求
- 2、各実習の評価の基準をどこにおくか
- 3、調査・見学の再吟味
- 4、学習指導法の研究
- 5、設備および教材教具の研究
- 6、指導者（教師）の態度と心構え

これらは、昭和二十七年度の研究目標ですが、研究の結果は、特集号または他誌に発表していきます。

昨年来行つてきた工場見学会は、得るところが少なくいと喜ばれています。本年も続行する予定です。

▽教科書と教師の指導書

昭和二十七年四月から使用される、本研究会編集・立川図書株式会社（旧光書房）発行の検定教科書は、基礎的技術とインフオーメーションについて豊富な資料を提供しようとした良心的な編集が認められて、モデルスクールや真摯な研究校に多数の採用をみている。別掲の通り、取次店へすでに配本され、四月には各採用校へ配本されることになっています。

思わぬ誤植や訂正箇所が発見され、その都度訂正に努めてきましたが、なお訂正もれがあつたり、改訂の必要があろうかと存じます。御指摘や御意見によつて、二十八年度においてはさらに改訂していきたいと存じます。遠慮なく御意見をお寄せ下さい。

なお、右教科書の教師用指導要領を、本誌とともに採用校に一冊宛贈呈します。ページ数の都合上要点を記しましたが、補足して御活用願います。

実験学校 指定計畫

本研究会では、全国的に職業・家庭科の優秀校を実験学校として指定し、積極的に指導や研究に当たりたいと考えています。それには、十分調査し、その実際を見せてもらひ予定です。各校で研究された印刷物などあればお送り下さい。

送ります。

寄贈資料

中学校職業教育の実践

山梨県南巨摩郡甲南中学校

生産教育の研究

千葉県市川市立第四中学校

青年学級第一次試案

山梨県南巨摩郡大須成公民館

職業家庭科研究協議会資料

東京都北多摩郡小平中学校

職業家庭科施設教材最低基準表

東京都北多摩郡中学校職業家庭科研究会

職業家庭科の教育計画

大分市立王子中学校

職業家庭科教育の要領

東京都新宿区牛込第一中学校

職業家庭科ワークブック

大分県中学校職業家庭科教育振興会

教科書配本と社名變更御通知

本社発行の昭和二十七年年度職業・家庭科教科書（農村向・都市向・家庭向）は、日本教科用図書販売株式会社を経て全国書店への配本手続きを完了いたしましたので四月新学期には、各採択学校へ届くことと存じます。

なお教科書の定価は昭和二十八年年度から最高価格が採用されることになると存じますので、小社教科書は一層廉価になる見込みです。

なお本社は、旧光書房を改め、立川図書株式会社と改称し、今後も教科書を中心に、學術参考書の刊行に精進致す所存でありますから、旧に倍する御支援をお願い申し上げます。この段誌上をもつて御通知申し上げます。

東京都中央区銀座東五ノ五
（振替東京八三三一四番）

立川図書株式会社
（旧名、光書房）

教科書指導の要領（教師用）（職業教育研究会編）

―農村向・都市向・家庭向各別（全三冊）―

右は各採択校へ一冊宛寄贈いたしました。追加必要の向は多少余分がありますので、実費（送料共）一冊八十円を振替又は為替で御拂込みあり次第送本申し上げます。

機関誌續刊

会員の整理

これまで研究会機関誌が定期に出せなかつたため、会員の整理ができて、事務上にも手数がかるの毎月特集による編集で、続刊いたします。この際なるべく一カ年分の会費（二百四十円）を振替にて拂込み下さい。今後は会員にのみ配布の予定ですから、とりあえずハガキでなりと意志表示を願います。

昭和二十七年三月十日印刷

昭和二十七年三月十五日発行

（定価 金二十円）

編集兼発行者 池田種生

東京都千代田区神田一ツ橋・教育会館

発行所 職業教育研究会

振替東京七七七一七六番

監 参議院議員 河崎なつ 東大助教授 宮原誠一
修 工学博士 関 英男 東京農大助教授 平井 忠

職業教育研究会編

職業家庭科検定教科書

家庭向

生活の設計

新しいくらし

楽しいしごと

都市向

将来にそなえて

働くちから

しごとの喜び

農村向

明かるい農村

大地と共に

村のしごと

本教科書の特色

1. 基礎的技術を分析し、各種の技術を広く取りあげて、学校で学習単元を作成するために、豊富な資料を提供するように編集されている。
2. しごととインフォメーションが融合している。
3. 家庭向（女子用）にも職業についてのしごととインフォメーションを取り入れ、女子の職業教育に資している。

東京都中央区銀座東5ノ5

発行所 立川図書株式会社（旧称 光書房）